

青年期前期と青年期後期における母娘の交流の観察と Circle Drawing の関連

久保田 桂子 (kikkbt17582_twty@hotmail.co.jp)

[聖心女子大学]

The relation of mother-daughter communication and Circle Drawing

Keiko Kubota

Graduate School of Arts, University of the Sacred Heart, Japan

Abstract

Pipp, Shaver, Jennings, Lamborn, & Fischer (1985) studied the variations of parent and late adolescent relationships by a retrospective method; Circle Drawing. The first purpose of this study was to compare the results with those of the previous study (Pipp et al., 1985), though the ages of participants were different. Early and late adolescents and their mothers were asked to draw two circles, one representing the daughter and another representing the mother, at three or four periods from infancy to the present. The results showed that the size of the daughters' circles were becoming larger with age whereas the mothers' circles were becoming smaller. The distances between the circles were changed from infancy to the present, namely the distance at the infant period was smaller than at the present. These results showed that the transition for mother-daughter relationships had the same pattern as in the previous study (Pipp et al., 1985). The second purpose of this study was to investigate the correlations between circle drawings and mother-daughter communications in two tasks. The communication tasks were to solve math questions and to cooperate in completing a craft project for which they had to plan the design and complete the finished project. Their utterances during two tasks were coded into fifteen categories based Condon, Cooper & Grotevant (1984). The results showed that some parts of the communications relate well with some aspects of the exercise with circles. That is, the results of this study showed that the mother-daughter relationships expressed by two circles were changing with age, and circle drawings express some parts of the actual communications, too.

Key words

early adolescent, late adolescent, mother-daughter relationship, Circle Drawing

1. 問題と目的

これまで、青年期については様々な研究が成されているが、1990年から2000年にかけて青年期の親子関係について焦点をあてた研究は、*Journal of Research on Adolescence* では28%、*Child Development* と *Developmental Psychology* では34%と、青年期の仲間関係に関する研究の半分の割合でしかない (Steinberg, 2001)。しかし、青年期の親子関係は、青年期を迎えた子どもにとって仲間関係と並び、重要な関係である。したがって、本研究では、まだまだ研究の少ない、青年期の親子関係に焦点をあて、検討していく。

久世・平石 (1992) によると、青年期の親子関係は三つの立場に分かれ、議論がなされてきた。すなわち、青年期危機説を中心に考えられる「分離や葛藤を強調する立場」、青年期平穏説を中心に考えられる「愛着や親密性を強調する立場」、そして、二つの立場を統合して考えようとする「分離と結合を統合的に捉える立場」である。

「分離と結合を統合的に捉える立場」にある Pipp, Shaver, Jennings, Lamborn, & Fischer (1985) は、分離と結合を年齢変数と関連づけて区別して捉えていく中で、大学生を対象に、回顧的な描画テストを行うことによって、親子関係

の変化を捉えようとした。すなわち、5つの年齢段階 (1～5才、6～10才、11～15才、16～20才、現在) における親子関係を、二つの円 (自分の円・親の円) を用いて描いてもらうことで、対象者自身が認識する親子関係の変化を検討しようとしたのである。そして、(a)1才から10才は、母親の円が自分の円よりもはるかに大きく、二つの円の距離は短いこと、(b)11才から20才は、母親の円が小さく、自分の円が大きくなると同時に、二つの円の大きさの違いも徐々に小さくなり、二つの円の距離が長くなること、(c)20才以降は、母親と自分の円の大きさが等しくなる一方、二つの円の距離は再び短くなるという結果を示した。さらに、Pipp et al. (1985) は、情緒的な繋がりを捉える尺度と Circle Drawing の関連を検討することで、1～5才まで親子は強く結びつき、子どもは親に包み込まれ守られているが、その結びつきは6～15才で弱まり、16～20才では二つの円の距離が大きくなることで葛藤や反抗が強調されるとした。しかし、Pipp et al. (1985) は、6～20才で生じた葛藤状態は長く続くわけではないとも述べている。すなわち、20才以降に二つの円が再び結びつくことが明らかとなったことで、親子関係は親密な関係へと再構築されると結論付けたのである。Pipp et al. (1985) の結果は、「青年期前期において親子の分離が強調されるが、その分離は続くのではなく、青年期後期において新たな結びつきが再構成される」と捉えることもできるだろう。以上の点をふま

え、本研究では、青年期の親子関係は時間を経て徐々に変化していく関係であるという立場で検討を進めていくと同時に、親子関係を捉える尺度として、Pipp et al. (1985) の作成した Circle Drawing を使用する。

日本においても、母親と子どもの関係について自由に絵を描かせ、その絵から様々な基本の形を抽出し、日本文化の根底にある心理的構図を明らかにしようとした研究が存在する(やまだ, 1988)。しかし、その研究では、得られた母親と子どもの絵を統計的に検討することなく、主観的な解釈のみで検討するに留まっている。また、Circle Drawing に類似した方法として、水島 (1978) により考案された家族関係単純図式投影法がある。これは、家族成員を表す一円玉大の円形のコマを直径 12 センチの円の書かれた B5 判の台紙に置くことで、現実および理想の家族関係を表現してもらうものである。家族関係単純図式投影法は、Circle Drawing と同様に、描画を苦手とする対象者に抵抗がなく、取り組み易いものであると同時に、得られたデータを量的・質的にも分析できる利点がある。しかし、家族関係単純図式投影法は、親と子どもの距離のみで検討を行うため、親と自分の存在の大きさといったものまでは測定できていない。以上のものと比較すると、Circle Drawing は、家族関係単純図式投影法の利点を保ちつつ、円の大きさについても対象者自身が決定できる、より自由度を増した親子関係の測定法として捉えることができるだろう。また、実際に家族成員に見立てた人形を同一平面上に配置したり、その人形にブロックなどで高さを与えることで、対象者に様々な状況下での家族構造を表現させる「シンボル配置技法」は、Circle Drawing と同様に、関係性を量的・質的に捉えようとする方法である。この技法を用いた尺度としては、八田 (1977) の Doll Location Test (DLT) や Gehring (1998) の Family System Test (FAST) などが例として挙げられる。八田 (2001) は、シンボル配置技法の有用性を以下のように述べている。すなわち①対象者の人間関係構造を包括的に理解できる点、②高度な言語表現能力を必要としない点、③対象者の心理的抵抗感が低く表現が容易である点、④人間関係構造の時間的変化について表現可能な点などである。以上の有用性は、Circle Drawing にも当てはめられると考える。

近年、日本は西洋化しつつあると言われているものの、日本独自の文化が親子関係に影響していることも事実である。青年期の親子関係についての研究からは、日本男子の父親との情緒的結合がアメリカ男子のものよりも低い一方で、日本女子とアメリカ女子における父親との情緒的結合は変化がないということや、母親との情緒的結合には国別による相違はないことが明らかとなっている(小野寺, 1993)。また、日本女子と父母との関係を検討した研究からは、母親との関係の善し悪しが父親との関係に影響を及ぼしていることが示唆されている(小野寺, 1984)。さらに、日本の家庭に焦点をあてた Gjerde & Shimizu (1995) は、日本の家庭は家庭内で生じる不一致をはっきりと表現するのを控える傾向があることを明らかにし、日本における家族関係の複雑さの一部を提唱している。青年期後期の大学

生を対象に日本とスイスの家族構造を比較した研究においても、日本はスイスよりも家族の親密性が低い傾向のあることが明らかとなっている(池田, 2001)。西欧に比べ日本の親密性が低いという点は、中見 (2003) の研究においても示されている。以上のような文化的な違いをふまえて考えると、欧米で作成された Circle Drawing を日本の親子関係を捉える尺度として用いるには十分な考慮が必要であろう。しかし、この点については、日本の大学生を対象に、Circle Drawing を用いて検討を行った大原 (1988) の研究においても、二つの円の動きは 5 つの段階において Pipp et al. (1985) の結果と同様の変化を示し、親子関係の情緒的な側面と関連していることが明らかとなっており、日本で使用することへの妥当性が示唆される。しかし、Pipp et al. (1985) や大原 (1988) は、大学生を対象に実施しているのみであり、二つの円の動きが、異なる年齢段階の子どもやその親においても同様に見られるかまでは検討できていない。また、二つの研究結果が、20 年経った現在の親子関係においてみられるかについても検討する必要があるだろう。したがって、本研究の第一の目的は、異なる対象者においても先行研究と同様の結果(二つの円の動き)が示されるかを検討することとする。

しかし、一口に親子関係といっても、家庭の中で一対一の関係のみで生活している青年は少なく、その範囲は膨大である。したがって、本研究では、親子関係の中でも特に、母娘関係に焦点をあてる。その背景には、母親が子育ての中心を担っている現状(Gjerde & Shimizu, 1995; 柏木・平山, 2006) や母親と娘の結びつきの強さが挙げられる。母親と娘の結びつきの強さに関しては、これまでの研究によって明らかとなっている。例えば、中学生から大学生を対象に親への情緒的依存や絆の意識を調査した渡邊 (1997) の研究からは、女子青年が母親に対し、情緒的で親密な関係を意識していることや、女子青年が示す母親への依存や絆意識は男子青年よりも強いことが明らかになっている。日本だけでなく、諸外国においても母親と娘を検討することの重要性について述べられており、Steinberg (1987) は、女子において第二次性徴が母親との親密性の減少、葛藤の増加、自立の増加を促すという結果を示している。また、Yau & Smetana (1996) は、中国において母親に対する葛藤は娘においてのみみられたことを明らかにした。

また、青年期の親子関係の研究法について概観してみると、実際の親子を観察し、その関係を捉えようとする研究もいくつかみられるが(Grotevant & Cooper, 1985, 1986; Gjerde, 1986; 平石, 2000a, 2000b, 2003, 2007; Tenebaum & Leaper, 2003)、多くの研究は、質問紙を用いた量的データを中心としているのが現状である。しかし、久保田 (2005b) が述べているように、親子関係を質問紙のみで捉えようとすることの限界から目をそらすことはできない。量的データによる検討が主流である現状を打破するためにも、親子関係を質的に捉えることが重要となってくるだろう。久保田 (2009) は、青年期の母娘を対象に、実際の母娘の交流場面を観察し、家族談話の分析マニュアルの邦訳版(Condon,

Cooper, & Grotevant, 1984 平石訳 1998) のコードを参考に評定を行い、質的な検討を行っている。そして、大学生の母娘が対等な関係で課題を遂行する一方で、中学生の母娘は母親が子どもを援助する側にまわり、子ども中心に課題を進めるという関係の違いを明らかにした。さらに、以上の結果は、青年期を通じて母娘の間で生じる役割の変化を表している。しかし、久保田 (2009) の研究は、観察者である第三者が客観的に捉えた関係でしかない。また、Pipp et al. (1985) の研究も、親子関係を捉える上で、実際の親子の交流を観察し、Circle Drawing との関連を検討するまでには至っていない。したがって、実際の交流を観察し、第三者が捉えた客観的な関係と Circle Drawing を通して得られる対象者自身が捉える関係との関連を検討し、Circle Drawing で描かれた二つの円のもつ意味について一部明らかにすることを第二の目的とする。

2. 予備調査

2.1 目的

Circle Drawing は親子関係を投影的に捉える良い尺度だと考えられるが、この尺度に関する研究はあまり多くない。したがって、予備調査として、本尺度の信頼性・妥当性について検討を行った。信頼性に関しては再テストを行うことで検討し、妥当性に関しては他の尺度項目との関係を見ることで検討を行った。

2.2 信頼性の検討

2.2.1 調査対象者

1年前に個別に調査協力を依頼し、調査内容を説明した上で、同意書の得られた母親と娘に、再度質問紙を郵送し、回答を求めた。女子中学生 ($M = 14.43$ 才, $SD = 1.09$) とその母親 ($M = 45.53$ 才, $SD = 3.44$) 14組、高校生 ($M = 17.25$ 才, $SD = .50$) と母親 ($M = 47.25$ 才, $SD = 2.99$) 4組、女子大学生・社会人 ($M = 21.33$ 才, $SD = 1.78$) と母親 ($M = 50.53$ 才, $SD = 3.48$) 18組である。

2.2.2 調査内容

Pipp et al. (1985) によって作成された Circle Drawing を邦訳し、用いた。本尺度では、「以下に示す各年齢において、お母様 (お子様) との関係を図を二つの円を用いて示して下さい。正しい描き方はございませんので、感じるままにご自由にお描き下さい。」という指示のもと、自身 (子ども) の年齢に当てはまる年齢段階 (1~5 才、6~10 才、11~15 才、16~20 才、現在) まで、母子関係を描くよう、回答を求めた。二つの円は、一辺 5cm の正方形の枠内に描くようになっており、年齢段階は B5 判の用紙に上段・下段の二段に分けて配置した。上段は、左から 1~5 才、6~10 才、11~15 才の三枠、下段は、16~20 才、現在の二枠となっている。

2.2.3 評定方法

対象者により描かれた二つの円に対する評定は、Pipp et al. (1985) にならい、各年齢段階における、(a) 子どもの円

の大きさ、(b) 母親の円の大きさ、(c) 二つの円の大きさの違い、(d) 二つの円の距離の 4 つのカテゴリーについて評定を行った。

子どもと母親の円の大きさは、円の直径 (単位 ; mm) を測定することで求めた。また、大きさの違いは、母親の円の直径から子どもの円の直径を引き、求めた。円の距離について、Pipp et al. (1985) は、親の円の中心と子どもの円の中心の距離を測ることのみで求めていたが、それだけでは、円の大きさが年齢段階によって異なることから生じる影響を無視していると考え、本研究では、母親の円の中心から子どもの円の中心までの距離 (単位 ; mm) を母親の円で割ることで、円の大きさの変化から生じる影響を少なくした。

2.2.4 結果と考察

子ども 36 名のデータを対象に 1 年前と現在の間に違いが見られるかを 2 (年数 ; 1 年前、現在) \times 3 (発達段階 ; 1~5 才、6~10 才、11~15 才) の分散分析を行い、検討した。その結果、「母親の円の大きさ」以外で、1 年前と現在の間に違いは見られなかった。同様に、母親 36 名のデータに対しても分散分析を行った結果、全ての項目で 1 年前と現在の間に違いは見られなかった。以上から、1 年という時間をおいても、二つの円の描き方に大きな違いは見られず、信頼性が認められたと判断した。

2.3 妥当性の検討

2.3.1 調査対象者

高校生 85 名 ($M = 17.54$ 才, $SD = .59$) と大学生 137 名 ($M = 20.29$ 才, $SD = .97$) の計 222 名に回答を求めた。質問紙は、授業時に配布し、その場で回答してもらった。

2.3.2 調査内容

2.3.2.1 Circle Drawing

Pipp et al. (1985) によって作成された Circle Drawing を用いたが、指示を「ご家族の中で、一番話しやすい方との“現在” の関係を二つの円を用いて示して下さい。正しい描き方はございませんので、感じるままにご自由にお描き下さい。」とし、回答を求めた。すなわち、妥当性の検討においては、二つの円の関係が関係性に関する尺度とどのような関連を示すかを検討するため、年齢段階を“現在” の一段階のみとした。また、家族の中の一人に限定することで調査対象者に不快な気持ちを抱かせないよう配慮し、回答相手も限定しなかった。しかし、本研究は母娘関係に注目しているため、222 名のうち、最も話しやすい相手を「母親」と選択した 145 名 (高校生 54 名、大学生 91 名) のみを検討対象としている。

2.3.2.2 情緒的な関係に関する尺度

Pipp et al. (1985) で用いられた情緒的な関係に関する尺度 (affection relationship dimensions) を邦訳し、使用した。邦訳に関しては、筆者が行った日本語訳を、日本語と英語を共に理解し生活に使用している日本在住の学生に Back

Table 1: Factor analysis of affection relationship dimensions

	F1	F2	F3	F4
12 私は、母が好きである	.81	.02	.04	.00
9 私は、母を愛している	.70	.14	-.08	.10
5 私は、母を受け入れている	.69	.24	.13	.14
2 私は、母に友好的である	.67	.17	.02	.12
21 私は、母と似ている	.44	.17	-.08	.26
4 私は、母を理解している	.36	.67	.25	.18
3 私は、母と考えを共有している	.42	.64	.11	.25
6 私は、母の全てを知っている	.27	.61	.26	.11
18 私は、母の存在を近くに感じている	.52	.47	-.07	.06
15 私は、母の気持ちを讀み取っている	.03	.43	.24	-.15
16 私は、母に影響を及ぼしている	.10	.38	-.02	.02
8 私は、母を頼っている	.40	.34	-.27	.20
10 私は、母から独立している	.02	.05	.88	.03
14 私は、母から自立している	.03	.22	.75	.08
17 私は、母のようにふるまっている	.12	.03	.04	.71
19 私は、母と同じように考えている	.21	.43	.17	.52
20 私は、母の興味を引こうとしている	.28	.10	.00	.47
7 私は、母の言うことを何でも聞いている	.17	.33	.09	.39
13 私は、母を世話している	-.13	.21	.36	.35
固有値	3.43	2.58	1.86	1.64
寄与率(%)	16.33	12.31	8.85	7.82
累積寄与率(%)	16.33	28.64	37.49	45.31

注：本研究では、相手を「母親」にした対象者のデータのみを対象としているため、表記は「相手」ではなく「母」としている。

Translation してもらい、意味が多少異なる文章に関しては議論し、決定した。本尺度は、自分が相手についてどのように思っているかを5段階で評定（全く自分に当てはまらない：1～全くそうだ：5）する尺度である。項目内容は、「私は、相手に何でも打ち明けている。」「私は、相手を頼っている。」「私は、相手を世話している。」といった21項目である。Cronbach の α 係数は、.88 であった。主因子法バリマックス回転を行った結果、4因子が抽出された（Table 1）。各因子は、第1因子を「母親への愛情」、第2因子を「母親との親密性」、第3因子を「母親からの独立」、第4因子を「母親との類似性」と命名した。各因子に対して、Cronbach の α 係数を算出した結果、第1因子が $\alpha = .80$ 、第2因子が $\alpha = .80$ 、第3因子が $\alpha = .82$ 、第4因子が $\alpha = .69$ であった。以上から、内的妥当性はある程度確認されたと判断し、4因子を下位尺度として用いることとした。

2.3.3 結果と考察

Circle Drawing において描かれる二つの円が、母親との情緒的な関わりを示しているかを検討するために、Circle Drawing の4項目と情緒的な関係に関する尺度の4因子に対して Pearson の相関係数を算出した結果、いくつかの項目間において有意な相関が示された（Table 2）。すなわち、「子どもの円の大きさ」と「母親からの独立」に有意な正の相関（ $r(145) = .18, p < .05$ ）が、「二つの円の距離」と「母親への愛情（ $r(145) = -.25, p < .01$ ）」、「母親との親密性（ $r(145) = -.27, p < .01$ ）」に負の相関が示された。相関係数の絶対値が小さく、低い相関であるため、以上の結果から二つの尺度間の関連について推測するまでには至らない

Table 2: Correlations between circle variables and scale scores

	子どもの円	母親の円	円の大きさ	円の距離
母親への愛情	-.02	.04	.06	-.25 **
母親との親密性	.06	.07	.04	-.27 **
母親からの独立	.18 *	.12	.02	-.09
母親との類似性	.09	.05	-.01	-.04

** $p < .01$ * $p < .05$

が、二つの尺度間の相関が0の帰無仮説は棄却されたと判断した。そして、以上から、妥当性の検討において、「母親の円の大きさ」や「二つの円の大きさ」に関連は示されなかったが、Circle Drawing によって描かれた二つの円は、相手との情緒的な関係にある程度示すことが、予備調査においても認められた。

2.4 まとめ

予備調査による検討から、Circle Drawing は二者関係における情緒的な関わりを捉える尺度として使用することが可能であると判断した。

3. 方法

3.1 調査対象者

個別に調査協力を依頼し、調査内容を説明した上で、同意書の得られた女子中学生（ $M = 13.45, SD = 1.00$ ）とその母親（ $M = 44.25, SD = 3.35$ ）21組と、女子大学・大学院生（ $M = 20.50, SD = 3.35$ ）とその母親（ $M = 49.53, SD = 3.48$ ）20組である。久保田（2005a；2005b）の研究結果において、親子関係には学校による違いがなかったため、本研究でも学校による統制は行っていない。しかし、親との同居は親子関係に影響を及ぼすと考え、親と同居している生徒、学生のみを対象とした。

3.2 調査内容

3.2.1 Circle Drawing

Pipp et al. (1985) により作成された尺度である。調査対象者には、「以下に示す各年齢において、お母様（お子様）との関係を二つの円（ご自身=Ⓢ・お母様=Ⓜ）を用いて示して下さい。正しい描き方はございませんので、感じるままにご自由にお描き下さい。」という指示のもと、子どもの年齢に当てはまる年齢段階（1～5才、6～10才、11～15才、16～20才、現在）まで、母子関係を描くよう、回答を求めた。二つの円の描き方は、予備調査時と同様に行った。

3.2.2 交流の観察

日常場面でみられる会話のみのコミュニケーションと作業を行いながらのコミュニケーションに関する母親と娘の交流を捉えるために、算数課題（条件を用いた解決、暗号解読）とミラー課題（ストーンを用いてミラーヘデザイン）を15分ずつ行った。二つの課題は、母親と娘のどちらか一方が能力において優れる事柄ではなく、平等に発言権を持

てるものであると同時に、調査場面に不慣れな調査対象者に抵抗がなく、取り組み易いものとなるよう設定した。課題を行っている様子は、録音・録画により記録した。

3.3 評定方法

3.3.1 二つの円の評定

予備調査時と同様に、Pipp et al. (1985) にならい、各年齢段階における、(a)子どもの円の大きさ、(b)母親の円の大きさ、(c)二つの円の大きさの違い、(d)二つの円の距離の4つのカテゴリーについて評定を行った。

3.3.2 母娘の交流の分析

課題を行っている際に生じた発言は逐語記録し、家族談話の分析マニュアルの邦訳版(平石, 1998)を参照に評定を行った。

まず始めに、各々の発話は、従属節を伴った独立節として定義される「チャンク」に分けられる。本研究では、先行研究にならい、各課題において母親と娘の発言を合わせた最初の150チャンク(二つの課題の合計300チャンク)を評定対象としている。

各チャンクは、会話を前に進める発言としての“動議機能”に属する「関係のないコメント」、「直接的な提案」、「間接的な提案」、「情報・確証のリクエスト」、「行為のリクエスト」、「不明確な動議機能」と、相手に言われたことへ反応する発言としての“応答機能”に属する「歩み寄りの開始」、「他者の考えに対する同意・受け入れ・採り入れ」、「他者の考えへの直接的反対・チャレンジ」、「他者の考えへの間接的反対・チャレンジ」、「情報・確証のリクエストへの回答」、「行為のリクエストに応じる」、「受け止め」、「不明確な応答機能」に分類される。そして、“動議機能”と“応答機能”のどちらにも属さない発言は、“その他の機能”に分類される。したがって、交流時に生じた発言(300チャンク)は、15カテゴリーのいずれかに評定されることとなる。

評定されたチャンクは、カテゴリーごとに合計した。さらに、本研究では、300チャンクのうちに含まれる対象者ごとのチャンク数の差の影響を考え、カテゴリーごとのチャンク数の合計を300チャンク内で生じた対象者の全チャンク数(15カテゴリーの総合計)で割り、割合を算出し、分析対象とした。

信頼性に関しては、ランダムに抽出した中学生と大学生の母親と娘、計2組分のデータを筆者と発達心理学領域の大学院生の計2名で評定し、一致率を算出した。その結果、50%~100%の一致率がみられた。一致率が50%と低かった「歩み寄りの開始」は分析から外したが、他のカテゴリーに関しては、評定の信頼性はあると判断し、分析対象とした。

4. 結果

4.1 4つのカテゴリーに関する検討

4.1.1 円の大きさ

年齢段階によって、子どもの円の大きさ・母親の円の大き

き・円の大きさの違いが変化しているかを検討するため、中学生・大学生・中学生の母親・大学生の母親それぞれに対して分散分析を行った(Figure 1、Figure 2、Figure 3)。Figure 1では、中学生($F(2,36) = 8.27, p < .01$)・大学生($F(3,57) = 5.62, p < .01$)・中学生の母親($F(2,40) = 5.40, p < .05$)・大学生の母親($F(3,57) = 15.42, p < .001$)において年齢段階による主効果が有意であった。したがって、年齢段階により、子どもの円は大きくなっていることが示された。Figure 2では、中学生($F(2,36) = 15.77, p < .001$)・大学生($F(3,57) = 23.66, p < .001$)・中学生の母親($F(2,40) = 14.40, p < .01$)・大学生の母親($F(3,57) = 4.26, p < .01$)において年齢段階による主効果が有意であった。したがって、年齢段階により、母親の円は小さくなっている

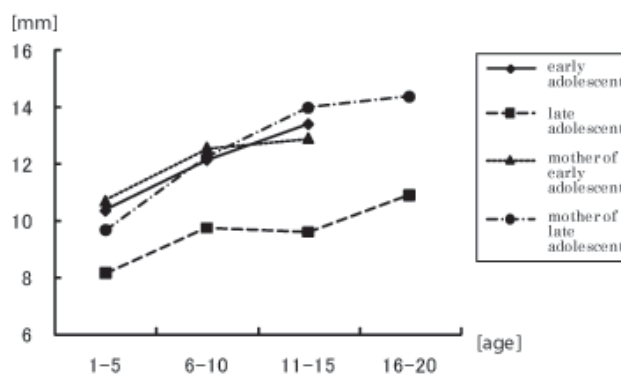


Figure 1: Mean circle diameter of daughter

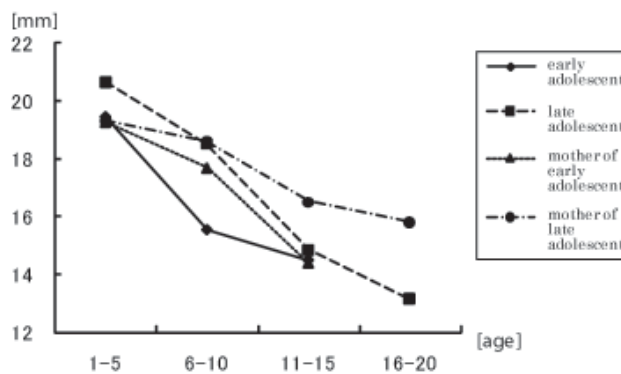


Figure 2: Mean circle diameter of mother

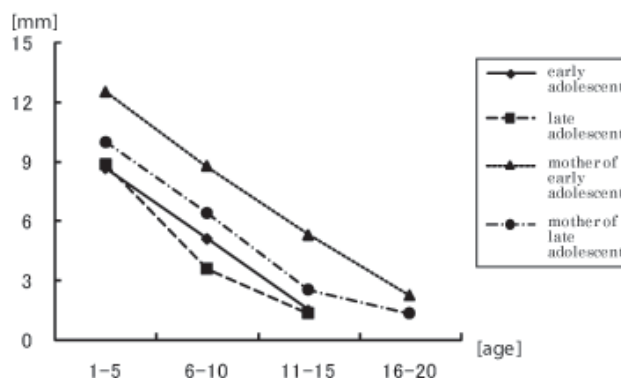


Figure 3: Mean differences of two circle size

ことが示された。Figure 3 においても、中学生 ($F(2,36) = 27.87, p < .001$)・大学生 ($F(3,57) = 32.51, p < .001$)・中学生の母親 ($F(2,40) = 17.22, p < .001$)・大学生の母親 ($F(3,57) = 22.10, p < .001$) において、年齢段階による主効果が有意であった。したがって、年齢段階により円の大きさの違いは小さくなっていることが明らかとなった。Figure 1 と Figure 2 の結果と合わせてみると、二つの円の大きさの違いは、子どもの円が年齢と共に大きくなり、母親の円が小さくなっていることから生じたといえる。

4.1.2 円の距離

年齢段階によって、子どもと母親の円の距離が変化しているかを検討するため、中学生・大学生・中学生の母親・大学生の母親それぞれに対して分散分析を行った (Figure 4)。その結果、中学生 ($F(2,36) = 7.20, p < .01$)・大学生 ($F(3,57) = 3.00, p < .05$)・中学生の母親 ($F(2,40) = 4.51, p < .05$)・大学生の母親 ($F(3,57) = 15.57, p < .001$) において、年齢段階による主効果が認められた。したがって、年齢段階により円の距離は大きくなっていくことが分かった。また、大学生に関しては、中学生や母親と異なり、11～15才で二つの円が最も離れ、16～20才で再び二つの円の距離が縮まる傾向が示された。

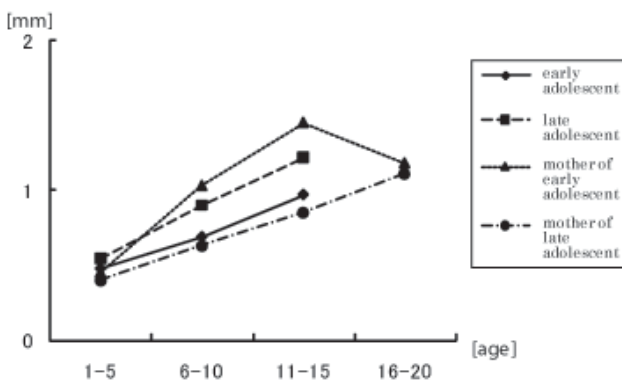


Figure 4: Mean distance between mother and daughter

4.2 交流と Circle Drawing の関連

4.2.1 娘における関連

母親との交流時の発言と娘の描く“現在”の母娘関係との関連を検討するため、会話分析の15カテゴリーと Circle Drawing の4カテゴリーに対して Pearson の相関係数を求めた。その結果、中学生においては、「二つの円の距離」と「間接的な提案」に有意な負の相関が ($r(20) = -.48, p < .05$)、「情報・確認のリクエストへの回答」に正の相関が示された ($r(20) = .59, p < .01$) 一方で、大学生においては、有意な相関は示されなかった。

以上から、中学生においては、二つの円の距離の広がり、相手が意見を言いやすいような発言をする傾向の減少や相手が尋ねてきた事柄に答える傾向の増加との関連が示唆された。

4.2.2 母親における関連

娘との交流時に生じる母親の発言と母親の描く“現在”の母娘関係との関連を検討するため、会話分析の15カテゴリーと Circle Drawing の4カテゴリーに対して Pearson の相関係数を算出した。その結果、中学生の母親においては、「二つの円の大きさの違い」と「直接的な提案」に有意な正の相関が示された ($r(20) = .46, p < .05$)。大学生の母親においては、「二つの円の距離」と「情報・確認のリクエスト」に有意な正の相関がみられた ($r(21) = .49, p < .05$)。

以上から、中学生の母親においては、二つの円の大きさが異なることと自己主張的な発言の増加に関連が示唆された。一方、大学生の母親に関しては、二つの円の距離の広がりや相手に情報を求める傾向の増加に関連がみられた。

5. 考察

5.1 4つのカテゴリーについての検討

二つの円に関して、対象者が異なっても Pipp et al. (1985) や大原 (1988) と同様の動きが示されるかを明らかにするために、カテゴリーごとに年齢段階による変化を検討した結果、中学生・大学生・中学生の母親・大学生の母親ともに、年齢段階が上がるにつれ、子どもの円が大きくなり、母親の円は小さくなることが分かった。また、二つの円の距離は、年齢段階が上がるにつれ、大きくなることが明らかとなった。

以上の結果は、異なる対象者においても、二つの円の動きは、先行研究 (Pipp et al., 1985; 大原, 1988) と同様の変化をすることを明らかにしている。また、日本においても、心理的離乳の観点から、落合・佐藤 (1996) が、中学生から大学院生までを対象に研究を行い、親子関係の変化を大きく5つの段階 (第1段階: 親が子と手を切る関係・親が子を抱え込む関係、第2段階: 親が子を危険から守る関係、第3段階: 子が困った時には親が支援する関係、第4段階: 子が親から信頼・承認されている関係、第5段階: 親が子を頼りにする関係) に分けると同時に、5つの段階は、年齢を経て変化すると述べている。大学生に過去・現在・未来の家族構造の表現を求めた池田の研究 (2003) においても、8才場面では比較的親密であり、14才場面は親密性が減少し、現在場面では親密性が高くなる傾向が示唆されている。先行研究の結果と併せて今回の研究結果を考えると、母娘関係は青年期を迎える中学生のころから結びつきが弱まると同時に、母親と娘を対等に捉えようとする傾向が強まると捉えることもできるであろう。

5.2 母娘の交流と Circle Drawing との関連

第三者が捉えた客観的な母娘関係と Circle Drawing を通して得られる対象者自身が捉える母娘関係との関連を検討した結果、中学生・中学生の母親・大学生の母親において、いくつかの関連が示された。

中学生の青年女子においては、二つの円の距離と交流時における発言との関連が明らかとなった。青年期の親子関係を不安定なものとして捉える立場である Blos (1967) は、

青年期を「第二の個体化」とし、個体化から生じる世代間（親子間）の葛藤に焦点を当て、個体化は自立を生じさせたり、理想としていた親イメージからの離脱、親との葛藤に繋がると結論付けた。自立と葛藤の関係については、中学生から高校生を対象とした研究において、年齢が上がるにつれ、親からの自立欲求は増し、それと同時に葛藤が増したことが明らかとなっている（Fuligni, 1998）。また、脱理想化に関しては、岡本・上地（1999）が、中学生と高校生を対象に研究を行い、中学生において児童期の理想化された親イメージが崩壊するという結果を示している。以上で述べた親との葛藤は、本研究においても、中学生において、二つの円の距離と相手を尊重することの減少との関連において示唆されたと考える。

中学生と大学生の母親においては、二つの円の大きさや距離と交流時における発言が関連していたが、その内容は大きく異なっていた。すなわち、中学生の母親は、母親の円が子どもの円よりも大きいことと主張的な発言をする傾向の多さに関連がみられ、子どもとの交流において支配的な傾向が示唆された。その一方で、大学生の母親は、母娘の間の距離が広がることと娘へリクエストすることの増加に関連がみられ、母娘の間に一定の距離はあるものの、母親が娘を頼りにしている傾向が明らかとなった。本研究の結果は、高木・柏木（2000）の研究において、大学生の母親が、娘に“良き理解者”となることを期待していたことから支持される。

5.3 まとめと今後の課題

年齢段階による二つの円の動きには、中学生、大学生、中学生の母親、大学生の母親といった対象者の年齢による違いは示されなかった。しかし、母娘の交流時に生じた発言内容と Circle Drawing との関連を検討すると、二つの円の関係の背景にある意味は、対象者により異なっていた。以上の結果は、Circle Drawing を用いる際、二つの円の描き方が同じであっても、その背後にある母娘関係は年齢段階により異なる意味をもつ点に留意しなければならないことを一部示唆している。今後は、本研究で得られた知見をさらに発展するために、以下に述べる課題をふまえたうえでの検討が必要であろう。すなわち、Circle Drawing は、二つの円を用いて親子関係を描かなければならないということ以外は、対象者自身の自由を尊重した親子関係の測定法である。今後は、親子関係について対象者が示した自由な表現を調査者がより理解できるよう、自由記述や面接（インタビュー）などを用いて、対象者自身に二つの円の関係について説明を求めることなどが必要となるであろう。そうすることで、より多面的な検討も可能になり、FAST や DLT のように、親子関係を捉える投影法的な尺度として、臨床場面等への使用にも繋がるかもしれない（相谷, 2001; 広瀬, 2001）。また、対象者についても、本研究は、青年前期と青年後期の母娘のみであったが、今後、男子や父親、青年中期の親子に対象を広げることも必要だと考える。

引用文献

- 相谷登 2001 第4ピークの少年非行—凶悪非行少年と薬物非行少年の家族理解— 八田武志（編）シンボル配置技法の理論と実際 ナカニシヤ出版 pp131-147.
- Blos, P. 1967 The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, **22**, 162-186.
- Condon, S. L., Cooper, C. R., & Grotevant, H. D. 1984 Manual for the analysis of family discourse. *Psychological Document*, **14**, No.2616. (平石賢二（訳）1998 家族談話の分析マニュアル 日本語簡易版 Ver. 1 未公開)
- Fuligni, J. A. 1998 Authority, autonomy, and parent-adolescent conflict and cohesion: A study of adolescents from Mexican, Chinese, Filipino, and European backgrounds. *Developmental Psychology*, **34**, 782-792.
- Gehring, T. M. 1998 *Family System Test: Manual*. Cambridge, MA, USA, & Goettingen, Germany: Hogrefe & Huber.
- Gjerde, P. F., & Shimizu, H. 1995 Family relationships and adolescent development in Japan: A family-systems perspective on the Japanese family. *Journal of Research on Adolescence*, **5**, 281-318.
- Gjerde, P. F. 1986 The interpersonal structure of family interaction settings: parent-adolescent relations in dyads and triads. *Developmental Psychology*, **22**, 297-304.
- Grotevant, H. D., & Cooper, C. R. 1985 Patterns of interaction in family relationships and the development of identity exploration in adolescent. *Child development*, **56**, 415-428.
- Grotevant, H. D., & Cooper, C. R. 1986 Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence. *Human Development*, **29**, 82-100.
- 八田武志 1977 Doll Location Test に関する研究 I—精神神経症患者への適用例について— 適性研究, **10**, 1-6.
- 八田武志 2001 シンボル配置技法の理論的背景 八田武志（編）シンボル配置技法の理論と実際 ナカニシヤ出版 pp1-18.
- 平石賢二 2000a 青年期後期の親子間コミュニケーションと対人意識, アイデンティティとの関連 家族心理学研究, **14**, 41-59.
- 平石賢二 2000b 青年期後期の親子間コミュニケーションの類型に関する事例研究 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）, **47**, 281-299.
- 平石賢二 2003 青年期の親子間コミュニケーションに関する研究—個性化モデルの視点から— 名古屋大学博士学位論文（未公開）.
- 平石賢二 2007 青年期の親子間コミュニケーション ナカニシヤ出版.
- 広瀬香織 2001 精神科臨床における Doll Location Test の適用 八田武志（編）シンボル配置技法の理論と実際 ナカニシヤ出版 pp47-58.
- 池田和夫 2001 FAST による家族構造認知の異文化間比較 八田武志（編）シンボル配置技法の理論と実際 ナカニシヤ出版 pp1-18.

- シヤ出版 pp149-163.
- 池田和夫 2003 日本人大学生の表現する過去・現在・未来の家族構造 人間環境学研究, **1**, 23-30.
- 柏木恵子・平山順子 2006 育児期家族にとっての夫・父親 柏木恵子・大野祥子・平山順子 (著) 家族心理学への招待—今, 日本の家族は? 家族の未来は?— ミネルヴァ書房 pp.118-125.
- 久保田桂子 2005a 中学・高校生におけるテスト不安と親子関係との関連 聖心女子大学教育学科卒業論文 (未公刊).
- 久保田桂子 2005b 女子中学生・高校生が報告する親との会話—発達の差と親への態度— 臨床発達心理学研究, **4**, 23-31.
- 久保田桂子 2009 青年期の母娘関係の発達差—会話分析による青年期前期と後期の交流の比較— 心理学研究, **79**, 530-535.
- 久世敏雄・平石賢二 1992 青年期の親子関係研究の展望 名古屋大学教育学部紀要, **39**, 77-88.
- 水島恵一 1978 実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ「体験と意識」に関する個別・総合プロジェクトに向けて— 文教大学紀要, **12**, 1-11.
- 中見仁美 2003 Family System Test による日本の家族について—Gehring の評価基準による「親密さ」と設問内容の比較— 関西学院大学教育学科研究年報, **29**, 15-21.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, **44**, 11-22.
- 岡本清孝・上地安昭 1999 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, **47**, 248-258.
- 小野寺敦子 1984 娘からみた父親の魅力 心理学研究, **55**, 289-295.
- 小野寺敦子 1993 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, **64**, 147-152.
- 大原明子 1988 両親との関係でとらえた青年の自己 聖心女子大学教育学科卒業論文 (未公刊).
- Pipp, S., Shaver, P., Jennings, S., Lamborn, S., & Fischer, K. W. 1985 Adolescents' theories about the development of their relationships with parents. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 991-1001.
- Steinberg, L. 1987 Impact of puberty on family relations: Effects of pubertal status and pubertal timing. *Developmental Psychology*, **23**, 451-460.
- Steinberg, L. 2001 We know some things: Parent-adolescent relationships in retrospect and prospect. *Journal of Research on Adolescence*, **11**, 1-19.
- 高木紀子・柏木恵子 2000 母親と娘の関係—夫との関係を中心に— 発達研究, **15**, 79-94.
- Tenebaum, H. R., & Leaper, C. 2003 Parent-child conversations about science: The socialization of gender inequities? *Developmental Psychology*, **39**, 34-47.
- 渡邊恵子 1997 青年期から成人期にわたる父母との心理的関係 母子研究, **18**, 23-31.
- やまだようこ 1988 私をつつむ母なるもの—イメージ画にみる日本文化の心理— 有斐閣.
- Yau, J., & Smetana, G. J. 1996 Adolescent-parent conflict among Chinese adolescents in Hong Kong. *Child Development*, **67**, 1262-1275.

謝辞

本論文は、聖心女子大学大学院文学研究科に提出された修士論文のデータの一部と新たなデータを用いて、再分析したものである。

調査にご協力頂いた皆様、研究や論文の作成にあたり貴重なご助言を頂いた川上清文教授 (聖心女子大学)、Sr. Mary Blish に心より感謝申し上げます。

(受稿：2009年2月4日 受理：2009年3月24日)